

## 音楽教育における声楽教授法の研究Ⅷ — 團 伊玖磨の歌曲を中心として —

A Study of Vocal Pedagogy in Music Education Ⅷ :  
“Centering on the Songs of Ikuma DAN”

橋 本 エリ子

Eriko HASHIMOTO

音楽教育講座

(平成26年9月30日受理)

### I. 緒言

音楽教育の中における歌唱指導の中で、日本歌曲を指導する際、「詩と音楽の融合」、歌詞の意味や解釈についての理解は言うまでもなく、行間を読み、さらに深く理解し、曲の詩情を自分の言葉で伝えるということを理解させ、指導することが最も大切なことである。

つまり、日本歌曲を歌唱するには、基礎となる正しい発声、日本語の詩の正しい発音及び詩の解釈だけでなく、日本語の歌詞の理解と日本音楽の研究、歴史的背景、作曲家及び作詞者の生涯及び作品が創作された当時の作曲家及び作詞者の心理状態などを詳細に理解した上で、歌唱することがより音楽性豊かな演奏へと導くことができよう。

本稿は、日本歌曲、特に團伊玖磨の歌曲作品を通して、声の技術、表現法、様式を理解することは言うまでもなく、日本語の正しい響き、詩行のリズムやアクセント、音節、韻律と音楽的特性、そして作曲家が詩をどのように解釈し、作品を生み出すきっかけになったのかを解明していくことにする。

團伊玖磨は、歌劇7作品、交響曲7作品、管弦楽曲18作品、室内楽曲22作品、歌曲12作品、合唱曲58作品などのクラシック音楽の他、童謡4作品、映画音楽・放送音楽12作品と幅広いジャンルの作品を作曲している。

その中でも独唱とピアノの為の歌曲作品に焦点を絞り、特に團伊玖磨が最も多く歌曲を作曲した年代の1946(昭和21)年22歳の時に作曲した北

原白秋の詩による『五つの断章』と、12年後の1958(昭和33)年34歳の時に、再度北原白秋の詩に作曲した歌曲集『三つの小唄』の韻律法と音楽的特性を分析すると共に、詩の理解を深めた表現法や作曲家による様式感について研究し、比較・分析していくことにする。

### II. 團伊玖磨の生涯

團伊玖磨の祖父は、三井合名会社の理事長を務めた團琢磨(男爵)、父は実業家(プリンス自動車社長)(九州朝日放送会長を歴任)、東京帝国大学文学部美術史学科助教授の美術史家であり、政治家(参議院議員)であった團伊能(男爵)と母美智子との長男として大正13(1924)年4月7日、東京の信濃町の慶友病院で生まれ、豊多摩郡原宿村(現在の渋谷区神宮前)で育った。

昭和6(1931)年、團伊玖磨が7歳の時、青山師範学校附属小学校に入学し、ピアノを学び始めている。翌年の3月、祖父である三井合名会社理事長であった祖父・團琢磨が日本橋の三井本店前で暗殺(血盟団事件)された。享年75歳であった。

團伊玖磨が8歳の時であり、後日祖父について、「祖父ほど僕の一生に影響を与えた人はいない」と語っている。<sup>注1</sup>

また、昭和10(1935)年11歳の時には、乾性肋膜炎の為、神奈川県の大磯で半年間転地療養をし、その頃から太田黒元雄著の『西洋音楽物語』を読む中で、作曲家を志望するようになる。

12歳の昭和11(1936)年、作曲を志す息子の

将来を案じた父伊能は團伊玖磨を伴い、山田耕筰を訪れて、作曲の道の険しさや難しさを説いてもらい断念させようとしたが、以下の通り山田耕筰から激励を受けている。<sup>注2</sup>

先生は鋭い眼付きで子供（團伊玖磨）を見据えていた末、「やり給え、そしてやるからには、最も正統的な勉強を積んで、最も本格的にやり給え」と言われたのである。

「これで僕の一生は決まってしまった。最も正統的な勉強を積んで、最も本格的に。その言葉は、12歳の時から今に至るまで、勉強中も、そして世の中に出てからも、あらゆる正統的でない音楽からの誘惑、本格的でない線に陥る安易への誘惑から厳しく僕を護って呉れる言葉であった。いつも僕は音楽家として生きて行く危ない岸でこの言葉を思い出した。」<sup>注3</sup>と振り返っている。

また、山田耕筰先生が、1965年11月30日に79歳で亡くなられた折の事を以下のように綴っている。

「先生は、旧暦29日の朝 永眠された。僕はその事をしらずにその朝、八丈行きの飛行機に乗っていた。そして、八丈の飛行場で、先生の訃報を知ったのである。（中略）そして僕は、今、どんな大きな穴が僕の心の中にあいてしまったかを改めて知ったのである。」<sup>注4</sup>

このように、團伊玖磨がいかに山田耕筰を師として仰ぎ、尊敬し、また影響を受けていたかを窺い知ることが出来よう。

13歳の昭和12（1937）年、青山学院中等部に入学する。同年、東京市麻布区材木町（現在の港区六本木）に転居している。

18歳の昭和17（1942）年には、東京音楽学校（現在の東京藝術大学）に入学し、大学では和声学と対位法を下総皖一（本名：覚三）に、近代和声学と管弦楽法を橋本國彦に、また楽式論を細川碧に、そして学外では山田耕筰に学んでいる。

昭和19（1944）年の20歳の時、東京音楽学校本科3年に在籍のまま陸軍戸山学校軍楽隊に入隊し、軍楽隊では小太鼓を担当し、芥川也寸志と共に吹奏楽の編曲も担当している。

翌年、昭和20（1945）年10月1日には復員して東京音楽学校を卒業し、諸井三郎に厳格な対位法を学ぶと共に、ベートーヴェンの交響曲などを楽曲分析することで、楽曲構造の重要性を学んでいる。このことは、團伊玖磨がその後多くの管弦楽曲やオペラの作曲をする上で大きな影響を与えたことは言うまでもない。

以上のように戦後の作曲家としては、團伊玖磨、

そして中田喜直が最も多くの歌曲作品を書き、今なお演奏される頻度が高いと言える。中田喜直が、歌曲や合唱曲、ポピュラー・ソング、そして童謡などを作曲したのに対して、團伊玖磨は、オペラや交響曲の分野に活動を広げて行った。

また、團伊玖磨の作曲活動は多岐に亘っており、歌曲の他にも、木下順二作「夕鶴」のために書かれたオペラ作品<夕鶴>を始めとして、交響曲では第1番イ調から交響曲第6番“HIROSHIMA”まで、協奏曲では<ヴァイオリンとピアノのための幻想曲第1番>他、管弦楽曲では序曲<東京オリンピック>他、室内楽曲、合唱曲、<雁><にぎりえ>等の多くの映画音楽、<おつかいありさん>（1950年）、<ぞうさん>（1952年）、<やぎさんゆうびん>（1952年）、<子守歌>（1968年）等の童謡、校歌・学歌を多数作曲している。

そして、本業の作曲以外にも指揮者として、さらに音楽活動だけでなく著作やエッセイも執筆する等、多方面に活躍することになる。

エッセイストとしての著作活動の面では、例えば「エスカルゴの歌」（1964年）、また昭和39（1964）年6月から『アサヒグラフ』に連載を始め、「パイプのけむり」「続パイプのけむり」[昭和37（1962）年第19回読売文学賞（随筆・紀行）を受賞]は、同誌が休刊する平成12（2000）年まで続けている。

#### 【交響曲・歌劇・管弦楽曲の主な作品】

作曲年	作品名	指揮
1948～1949年	交響曲第1番 イ調	近衛秀麿
1952年	歌劇『夕鶴』	團伊玖磨
1954年	管弦楽組曲『シルクロード』	團伊玖磨
1955年	歌劇『聴耳頭巾』	團伊玖磨
1956年	交響曲第2番 変口長調	上田 仁
1958年	歌劇『楊貴妃』	團伊玖磨
1960年	交響曲第3番	岩城宏之
1964～1965年	交響曲第4番	團伊玖磨
1965年	交響曲第5番『駿河』	團伊玖磨
1965年	合奏協奏曲 hpd	團伊玖磨
1967年	『日本からの手紙』第1番	A. フィー ドラー
1969年	『日本からの手紙』第2番	藤田由之
1972年	『日本からの手紙』第3番	
1972年	歌劇『ひかりごけ』	
1975年	歌劇『ちゃんちき』	森 正

1984年	交響幻想曲『万里長城』	李 徳倫
1985年	交響曲第6番 “HIROSHIMA”	團伊玖磨
1986年	管弦楽のための『飛天繚乱』	
1988年	管弦楽のためのカンタータ『まれびと』	團伊玖磨
未完	交響曲第7番『邪宗門』	

團伊玖磨の名が知られるようになったのは、戦後間もない昭和22(1947)年、NHKで放送された<花の街>のヒットからである。美しい親しみやすい旋律として人々の心を捉え、今も国民的な歌曲として歌い継がれている。

翌年の昭和23(1948)年から昭和28(1953)年までの5年間NHKの専属作曲家となり、昭和27(1952)年には、NHKのラジオ体操第2を作曲している。

昭和25(1950)年、NHK開局25年記念管弦楽曲懸賞募集作品の<交響曲第1番イ調>で特賞となり、脚光を浴び、さらに昭和27(1952)年のオペラ作品<夕鶴>により、作曲家としての地位を確立する。

クラシック音楽界の活動としては、昭和28(1953)年29歳の秋に、映画の作曲で来ていた芥川也寸志(1925-1989)とフランスから帰国したばかりの黛敏郎(1929-1997)と大映京都太秦撮影所で出会い、「三人の会」を結成している。翌年の1954年から1962年まで、計5回のオーケストラの演奏会を行い、自作を発表する活動を展開し、第1回演奏会では、<ブルレスケ風交響曲>(指揮：團伊玖磨)、第2回演奏会では、管弦楽組曲<シルクロード>(指揮：團伊玖磨)、第3回演奏会では、交響組曲<アラビア紀行>(指揮：團伊玖磨)、第4回演奏会では、<交響曲第3番>(指揮：團伊玖磨)、第5回演奏会では、管弦楽組曲<シルクロード>(指揮：團伊玖磨)と3人の会の結成により、お互いに切磋琢磨して名作が次々に生み出されることになる。

昭和47(1972)年10月、48歳の時に、日中国交正常化祝賀の為、代表者の一員として中国の北京や広州を訪問している。

また同時期には、オペラ<ひかりごけ>を大阪において初演し、鮮烈かつ凄絶の響きで満場の聴衆に衝撃を与えることになる。翌年の昭和48(1973)年49歳の時には、日本芸術院会員に就任している。

昭和60(1985)年には、エドムンド・ブランデン詩による交響曲第6番“HIROSHIMA”が團

伊玖磨の指揮により、広島平和コンサートで初演され、平成11(1999)年には、文化功労者に列せられている。

平成12(2000)年6月11日から2001年3月11日まで「DAN YEAR2000」が開催された。この世紀を超えるこの大フェスティバルは、作曲家團伊玖磨の代表作を、北は北海道・旭川から南は九州・久留米まで全国21会場を舞台に31演目を日本全土で紹介するものであった。

上演された作品は、オペラ、オーケストラ、室内楽、器楽、声楽、童謡、映画音楽など多岐にわたっており、團伊玖磨の作品を集中的にとりあげるといって大イベントであった。日本の作曲家のみならず海外作曲家でも、一人の作曲家に焦点をあてる大規模のフェスティバルは、これまでには演奏されておらず、下記の主演公演の一覧表の示す通り、広大に展開されることになった。<sup>注5</sup>

< DAN YEAR 2000 >主催公演一覧  
2000年6月11日～2001年3月11日

日程	公演	場所
6月11日(日)	オペラ《夕鶴》 指揮：團伊玖磨	よこすか芸術劇場
6月27日(火)	東京フィルハーモニー交響楽団特別演奏会 「團伊玖磨の世界」 ・交響曲第3番 ・《夕鶴》各場面集 ・管弦楽組曲《シルクロード》 指揮・お話：團伊玖磨	サントリーホール
7月23日(日)	「團伊玖磨の世界～合唱と管弦楽のための組曲」 ・交響曲第1番 ・合唱と管弦楽のための《西海讃歌》 ・合唱と管弦楽のための組曲《横須賀》 指揮：團伊玖磨、石野雅樹	よこすか芸術劇場
<夢 DAN YEAR 2000 特別記念日 10.15>		
10月15日(日)	ジャパン・スーパー・バンド演奏会「プラスファンタジー」 ・祝典行進曲 ・新・祝典行進曲 ・吹奏楽のための組曲《行列幻想》 ・行進曲《青年》	神奈川県民ホール前広場
10月15日(日)～11月4日(土)	写真展「人間・團伊玖磨」	神奈川県民ホールギャラリー
10月15日(日)	スペシャルコンサート 「團伊玖磨オペラの夕べ」 ・《素戔鳴》 ・《建 TAKERU》	神奈川県民ホール

10月21日 (土)	街道 (みち) ~辻井喬 / 團伊玖磨 “二人展” ・独唱・混声合唱・オーボエ・ ピアノのための組曲《木曾 路》 ・独唱・混声合唱・フルート・ ピアノのための組曲《長崎 街道》 指揮：團伊玖磨	神奈川県立 音楽堂
10月29日 (日)	ファンタジア~團伊玖磨 室内楽の世界 ・4本のファゴットのための ソナタ ・ヴァイオリンとピアノのた めのファンタジー第1番~ 第3番 ・フルートとハープのための 《羽衣》 ・無伴奏ヴァイオリン・ソナ タ ・無伴奏チェロ・ソナタ ・ヴァイオリンとチェロのた めの《対話》 ・ピアノ組曲《3つのノヴェ レット》 ・2台のソロ・ヴァイオリン と弦楽合奏のための《古雅 なるファンタジア》	神奈川県立 音楽堂
11月4日 (土)	シンポジウム「團伊玖磨~音 楽世界の変遷」	神奈川県民 ホール(小)
11月11日 (土)	わがうた~團伊玖磨 歌曲の 世界	神奈川県立 音楽堂
11月23日 (木)	由紀さおり・安田祥子 童謡コンサート	神奈川県民 ホール
12月8日 (金) 10日(日)	オペラ《ちゃんちき》 指揮：佐藤功太郎	神奈川県民 ホール
2001年 1月20日 (土)	神奈川フィルハーモニー管弦 楽団第172回定期演奏会 ・管弦楽幻想曲《飛天繚乱》 ・《夕鶴》よりアリア ・交響曲第2番 指揮：團伊玖磨	横浜みなと みらいホー ル
2001年 1月27日 (土)	読売日本交響楽団演奏会「團 伊玖磨 交響楽」	神奈川県民 ホール
2001年 1月28日 (日)	交響曲第4番 交響曲第6番 《HIROSHIMA》	横浜みなと みらいホー ル
2001年 3月11日 (日)	歌曲集《マレー乙女の歌へる》 初演	横浜みなと みらいホー ル(小)

以上のように、<DAN YEAR 2000> は、9ヶ月間に全国の会場で、上記の演目が開催され、総出演者は1,800名に達した。團伊玖磨自身も11の公演で、自ら指揮台に立っている。

このように1年を通じて日本を代表するソリストが終結し、その規模は日本の音楽史に先例を見ないものであった。この企画は、團伊玖磨自身が

創作活動を回顧して、声楽作品、器楽作品、オペラ、映画音楽の代表する4つの作品から、特に自信のある作品を選曲している。團伊玖磨がお世話になった神奈川県に、神奈川県芸術文化財団の芸術総監督の地位を去るにあたって、恩返しの意味で生まれたものである。

多くの日本人に親しまれた国民的な作曲家であった團伊玖磨は、中国を愛し、日本との交流に力を注ぎ、平成13(2000)年5月17日に中国の蘇州で、日中文化交流協会の代表団団長として中国に訪問中、心不全の為急逝、77歳の生涯を閉じている。

### Ⅲ. 歌曲創作の作風の変遷

團伊玖磨の独唱とピアノの為の歌曲作品は、昭和17(1942)年の18歳から昭和37(1962)年の38歳にかけて20年間に最も多く作曲されている。

特にこの20年間中断することなく作曲し続けた歌曲作品について分析し、歌曲創作の作風の変遷を辿ることとする。

團伊玖磨の歌曲の出発点となった作品は、東京音楽学校(現在の東京藝術大学)の在学中の昭和17(1942)年18歳の時に作曲された島崎藤村の詩による<小諸なる古城のほとり>と19歳の時に作曲した佐藤春夫の詩による<しぐれに寄する抒情>である。

その後、東京音楽学校在籍中に陸軍戸山学校軍楽隊に入隊しており、復員後の昭和20(1945)年の終戦の年に発表した、團伊玖磨が21歳の時作品『六つの子供のうた』(Ⅰ. いたち, Ⅱ. ひょうたん, Ⅲ. 秋の野, Ⅳ. さより, Ⅴ. からりこ, Ⅵ. 雪女)は、戦争直後の日本の楽壇に、新鮮な希望の灯をともした。

歌曲作家としての出発点となったこの作品は、北原白秋の詩に寄っており、北原白秋の詩にインスピレーションを得て、この歌曲集が誕生したのである。アルト歌手の四家文子によって初演され、素朴な中に、鋭い創意の閃くこの『六つの子供の歌』は、團伊玖磨の妥協のない、自己の信ずる音のみで綴り上げた真実の世界があり、今日もなお鮮度を失うことなく歌い継がれている。

この作品以降も北原白秋の詩を好み、作品が作曲されている。例えば、22歳の時に歌曲集『五つの断章』、26歳の時に歌曲集『美濃びとに』、32歳の時に歌曲集『雨のあとさき』、そして34歳の時に歌曲集『三つの小唄』と言う具合に名作が次々に生み出される。

『六つの子供のうた』は、戦争直後であった為、

日本の楽壇においてはまさに輝く希望であり、みずみずしい優しい旋律や穏やかで素朴な和声は、現在もなお新鮮に感じられる。また、この作品は、その後の作曲家達の「子供のための歌曲集」を作曲する上での発想の基本となり、記念碑的作品となっている。例えば、中田喜直の『六つの子供の歌』(1947年)や『こどものための8つのうた』(1958年)、また諸井誠の歌曲集『子供の国』(1950年)、湯山昭の歌曲集『子供のために』(1953年)、石桁真礼生の『子供のうた』(1961年)などが次々に生み出されることになる。

團伊玖磨の歌曲作品の大半の特徴としては、下記表の示す通り、一人の詩人によるもので統一され、また組曲形式にまとめられた歌曲集、つまりチクルスでまとめられていることに気付く。團は、その詩人の持つ小宇宙を組曲形式の歌曲で表現したのである。

作曲	曲名
1945年	『六つの子供のうた』(北原白秋詩) (I. いのち, II. ひょうたん, III. 秋の野, IV. さより, V. からりこ, VI. 雪女)
1946年	『五つの断章』(北原白秋詩) (I. 野辺, II. 舟唄, III. あかき木の実, IV. 朝明, V. 希望)
1947年	『わがうた』(北山冬一郎詩) (I. 序の歌, II. 孤独とは, III. ひぐらし, IV. 追悼歌, V. 紫陽花)
1948年	『萩原朔太郎による四つの詩』(I. 雲雀料理, II. 草の莖, III. 遊泳, IV. 笛)
1950年	『美濃びとに』(北原白秋詩)(I. うた, II. 秋, III. 閑か, IV. 美濃びとに, V. 雀をどり)
1951年	『東京小景』(大田黒元雄詩) (I. 駿河台, II. 日比谷, III. 銀座, IV. 人形町, V. よし町, VI. 上野, VII. 両国)
1955年	『抒情歌』(大木実詩) (I. 花季, II. 路地の子, III. 藤の花)
1956年	『雨のあとさき』(北原白秋詩) (I. 雨, II. 雨のあと)
1958年	『三つの小唄』(北原白秋詩) (I. 春の鳥, II. 石竹, III. 彼岸花)
1962年	『ジャン・コクトーに依る八つの詩』 (I. 港, II. レア, III. 耳, IV. 山鳩, V. 黒人と美女, VI. 唄, VII. よいもの, VIII. 偶作)
2000年	歌曲集『マレー乙女の歌へる』(イヴァン・ ゴル(Yvan Goll)詩, 堀口大學訳)

終戦後の團伊玖磨は、近衛秀磨のもとで指揮法と管弦楽法を学んでいる。彼は、第二次大戦末期にドイツの収容所に抑留されていたが、敗戦とともに帰国していた。近衛秀磨の影響もあり、團伊玖磨は、音楽的にオーケストラを一つの理想の世

界と考え、その表現機能に憧憬を抱き、歌曲の伴奏をオーケストラ化することに向かっている。

代表作としては、昭和21(1946)年、22歳の時に作曲された管弦楽付き歌曲<二つの抒情詩>があり、この<二つの抒情詩>は、日本音楽連盟主催作品委嘱コンクールにおいて入選している。

同時期の22歳の時には、北原白秋の詩による歌曲集『五つの断章』(I. 野辺, II. 舟唄, III. あかき木の実, IV. 朝明, V. 希望)の作曲を完成させ、團伊玖磨が作曲家として、また芸術家として生きていく決意が込められた作品となっている。

昭和22年(1947)年の團伊玖磨が23歳の時には、NHKの委嘱により作曲した<花の街>(詩: 江間章子)を作曲した。この作品はラジオ番組「婦人の時間」のテーマ・ソングとなり、全国に知れわたり、「国民歌曲」として親しまれることになる。

この<花の街>の誕生秘話は、当時戦争が終わり、地上には瓦礫の山となった一面の焼け跡をみて、NHKのラジオ番組「婦人の時間」の婦人部長であった江上フジさんが、詩人の江間章子さんに“夢と希望を与えるような詩”を依頼したことに始まっている。

團伊玖磨は、<花の街>作曲当時のエピソードを以下の通り書き記している。<sup>注6</sup>

「昭和22年の暮れのこと、隣家のお嬢さんが訪ねてきた。NHKに勤めていて「婦人の時間」の係をしているのですが、ときどき聞こえるピアノ音から作曲の勉強をしておられることを知って、歌の依頼にきました、一編の詩を示された。江間章子の<花の街>であった。喜んで作曲をした。そして、この歌は「婦人の時間」の歌として、昭和23年の春、NHKの電波にのって全国に送られていった。

<花の街>のメロディーが日本の街々に流れていったころ、日本はいたるところ焼け跡だらけだった。まだ戦争中の地下壕に暮らしている人もたくさんいた。現実の日本の街は、<花の街>ではなかった。作詞江間章子さんは、希望をもっていつか日本じゅうの街に美しい花が咲くようにしようとうたっているのである。

また同時期には、北山冬一郎の詩による歌曲集『わがうた』(I. 序の歌, II. 孤独とは, III. ひぐらし, IV. 追悼歌, V. 紫陽花)を作曲している。

『わがうた』は、戦後間もない荒廃の中でみずみずしい感性を歌いだし、高い評価を受けた詩人北山冬一郎の詩集「祝婚歌」の詩に寄っている。

詩人北山冬一郎は、この詩の中に“悔恨”を歌

い、團伊玖磨はその詩人の悲しみを見事にすくい上げ、作曲家の中にひそんでいる“孤独”の精神と重ねて、最も純粋な形で抒情を歌い上げたのである。

I番の〈序の歌〉では、落ち着いた趣を備えた心の独白を表現し、II番の〈孤独とは〉では、曲全体において、4分の3拍子と4分の2拍子が繰り返される中で、ピアノの分散和音により金魚が弧を描いて泳いでいる様子が描かれ、III番の〈ひぐらし〉では、9/8拍子のゆったりとした曲の中に、夕暮れの風景や夏の終わりの風、そして聞こえてくる“ひぐらし”の鳴き声を織り交ぜており、平明な抒情的な作曲により、詩人の物悲しさを見事に表現した作品に仕上がっている。IV番の〈追悼歌〉は、祖国を離れ、異国の地で戦い、命を落とした兵士たちを追悼する歌で、前奏から曲全体において鏤められた重々しい葬送行進曲風伴奏による葬送曲となっている。戦争で兵士達の死、魂は天に昇った。兵士たちが死ぬことで戦いから解放され、兵士たちの死や戦後の荒廃を明るく美しい太陽が褒め讃えているかのように照らし続けている。そしてV番の〈紫陽花〉は、7月の太陽を受けて目もくらむような情熱で、求めることとめぐり逢うことのできない想いと期待を歌っている。咲き誇る鮮やかな紫陽花が感動的な締めくくりとなっている。この歌曲集『わがうた』は、ピアノ伴奏部に、これまでの作品には見られなかったオーケストラの音色、つまり各楽器の音色が見られるようになったことが特徴と言える。

昭和23(1947)年、團伊玖磨はNHKの専属の作曲家となっている。この年作曲された作品として、歌曲集『萩原朔太郎に依る四つの歌』(I.雲雀料理, II.草の莖, III.遊泳, IV.笛)がある。この萩原朔太郎の詩は、第I・II・IV曲の3曲が詩集『月に吠える』、第III曲目は、詩集『蝶を夢む』から選ばれ、作曲者の意思が十分に語られた作品と言える。4曲それぞれが独自の様式を持ち、それぞれの作品が照射し合うような構成となり、特に2曲目〈草の莖〉では、ピアノ伴奏部が寒々とした冬の情景を見事に描き、声部では高音域で神秘的な静けさを描写するなど極めて秀逸な作品に仕上げられている。

その後、萩原朔太郎の詩に依る作品として、3年後の昭和26(1951)年に〈旅上〉がある。この作品は、これまでの萩原朔太郎の詩に作曲した作品とは異なり、詩に対する確実な反射が歌の表現の上に表出されてくる。

昭和24(1949)年、25歳の時に木下順二作品

の民話劇『夕鶴』の演劇付帯音楽を作曲した。この作品から、5音階の日本的なメロディーを多用し、透明感のある管弦楽法による作品となっている。素朴な叙情と純真な情趣が聴衆の耳と心を捉え、大ヒットなった作品である。

26歳の昭和25(1950)年には、北原白秋の詩による歌曲集『美濃びとに』が作曲された。第1曲〈うた〉では、北原白秋の語感と團伊玖磨の音感が見事に結集し、繊細な世界観を表現し、第2曲〈秋〉では、精妙な音感覚が貫かれ、第3曲〈閑か〉では、静かさを秘めた繊細な分散和音を背景に、表情豊かなメロディーが歌われ、第4曲〈美濃びとに〉では、深く沈潜した瞑想的な和音を背景に、ゆるやかなメリスマを伴った息の長いヴォカリーズ風のメロディーが歌われ、第5曲〈雀をどり〉では、歌詞が6番までの有節歌曲で作曲されており、軽快なリズムを伴ったコミカルな作品に仕上げられている。この歌曲集『美濃びとに』では、日本の情緒を生かした独特の雰囲気があり、團伊玖磨に潜む「日本への回帰」が自然に描かれていると言えよう。

昭和26(1951)年27歳の時には、NHKのラジオ番組「婦人の時間」の委嘱により、野上彰の詩による〈子守歌〉を作曲している。平易な言葉で綴られたメルヘンの世界を、情感に快く響く抒情的な旋律で作曲されており、たちまち多くの人達に親しまれる作品となっている。

同時期には歌曲集『東京小景』も作曲された。大田黒元雄の同名の「東京小景」歌集から、〈駿河台〉〈日本橋〉〈銀座〉〈人形町〉〈よし町〉〈上野〉〈両国〉の短歌8首を選び、シャンソン風に仕上げられた連作歌曲集となっている。

團伊玖磨が28歳の昭和27(1952)年1月28日には、オペラ『夕鶴』が大阪で初演された。この作品をもって、團伊玖磨の作曲家としての名声が確立される。『夕鶴』は昭和32(1957)年に、スイスのチューリッヒ歌劇場で上演され、海外で上演した日本人作曲家初のオペラ作品となった。

このように日本の代表的な創作オペラとして国際的にも評価を得、公演は国内だけでなく、ヨーロッパ、アメリカ、中国など世界各地で上演された。上演回数は500回を越える程であり、その功績が認められ、山田耕筰作曲賞、毎日音楽賞、伊庭歌劇賞を受賞している。

同時期の作品としては、童謡として広く親しまれているまど・みちお詩による〈ぞうさん〉〈やぎさんゆうびん〉が作曲されている。その他、関根栄一詩の〈おつかいありさん〉が昭和

25 (1950) 年に作曲され、子供の歌として広く愛される作品が次々に生み出されることになる。

中期以降の作品には、常に調性音楽であるが、しばしば不協和音が試みられるようになる。その作風は、同時にロマンティックな異国情緒を表出しようとする傾向に変化していくことが窺える。

昭和 29 (1954) 年には、谷川俊太郎の詩による <はる> が作曲され、三宅春恵さんにより初演された。<はる> は、谷川俊太郎が昭和 27 (1952) 年に刊行した第 1 詩「二十億光年の孤独」から選んだ 1 篇の詩で、宇宙の神秘、自然の恵みへの感動と感謝を静かに神へ語りかける詩の内容と言葉の韻律を見事に生かしたすがすがしい抒情的な作品へと仕上げられている。

その後、昭和 30 (1955) 年、31 歳の時には、大木実の詩による歌曲集『抒情歌』(I. 花季, II. 路地の子, III. 藤の花) が作曲される。この歌曲集は、これまでの作品とは異なり、声部は朗唱風で、伴奏部はシンプルな音の構造の作風で書かれている。特に、第 3 曲目の <藤の花> では、詩の持つ深い情感があり、詩に対する極めて鮮明なイメージが音で描写されている。

昭和 33 (1958) 年、34 歳の時には、歌曲集『三つの小唄』が作曲された。詩は、團伊玖磨が好んだ北原白秋によるもので、西洋音楽の技法を使用しながら凝縮した時間の間を見事に描写し、詩の行間に潜んでいる文字には表せない日本的な“間”が表現されている。

昭和 37 (1962) 年 38 歳の時に、歌曲集『ジャン・コクトーに依る八つの詩』が作曲された。この作品は、歌の楽しみが横溢していて、瀟洒で楽しい作品に仕上げられている。

平成 12 (2000) 年、75 歳の時に作曲された歌曲集『マレー乙女の歌へる』が作曲された。前作『ジャン・コクトーによる八つの詩』の作曲以来の新作で、38 年もの長い空白期間がある。この作品が、團伊玖磨の最後の作品となった。

歌詞は、フランスの詩人イヴァン・ゴルの詩を堀口大學が訳したものである。イヴァン・ゴル (1891-1950) は、シュルレアリスム (超現実主義) を掲げたフランスの詩人であり、堀口大學により、流麗な日本語の美しさが際立つ訳詞になっている。この詩の官能世界を團伊玖磨の音楽により、詩から見事にニュアンスを表出させ、フルートの伴奏により心の震えを描写している。初演は、2001 年 3 月 11 日に横浜みなとみらいホールで、永井和子さんにより発表された。この作品では、團伊玖磨の厳しい自己凝視の姿が貫いており、彼

の新たな発見と創造が構築されたと言えよう。

#### IV. 歌曲集『五つの断章』と歌曲集『三つの小唄』の詩の韻律に関して

日本語の伝統的韻律では、拍が最小単位となり、5 拍を基本とする七五調・五七調が良く使われている。詩と音楽のリズムの上で、頭韻や脚韻は大変重要な要素となっており、韻律法を良く理解して演奏することが大切である。

北原白秋は、日本語の持つ音韻的な美しさを、見事に文字で移し得た抒情詩人であり、團伊玖磨の音楽的思念と見事に一致したと言えよう。

では、團伊玖磨の作品の中から、歌曲集『五つの断章』と歌曲集『三つの小唄』の音韻的美しさを上手く生かす手段として、混合拍子による作曲法を使用している。従って、韻律の分析と混合拍子による検証を行うことにする。

明治 44 (1911) 年 6 月に発表された北原白秋の第二詩集『思い出』は、幼少期の思い出を故郷柳川の異国情緒溢れる風物と共に描いた作品で、副題「抒情小曲集」という副題が付けられている。

第一曲目の <野辺> は、「断章 61」の中の 48. で、原詩は番号のみで、題名は付されていない。従って <野辺> は、團伊玖磨によって付けられた題名である。

歌曲集『五つの断章』

一. 野辺 . . . . . 主として五・七調

韻律は、いずれも五・七調を主として、

「五・四 五・六 五・七 五・七」

六 五・四」

(4/4) なにゆゑに 汝は泣く? (4/5) 五・四

(3/4) あたたかに 夕日にほひ (2/4), 五・六

(4/4) たんぽぽの (4/4+1/8) やはき溜息 五・七

(4/4) 野に蒸して 甘くちらほふ。 五・七

(3/4) さるを (2/4) <sup>おみな</sup>女 (4/4), 六

なにゆゑに 汝は泣く? 五・四

北原白秋の詩のリズムは、上記の通り五・七調の韻律で、二節の構成となっており、一行目の「どうしてお前は泣くのか?」という問いかけで始まっている。続く二、三行目は、春の夕暮れの中、たんぽぽの香りを漂わせて、春風により綿毛が漂い散っていく様が描写されている。このようなうらかな春の夕暮れに、“さるを”(それなのになぜ女の人は泣いているのだろうか?) と少年の驚きと大人の女性の切ない気持ちを垣間見たときめきが、少年時代の『思ひ出』として描かれている。

次に第二曲目の〈舟唄〉は、副題に付けられている「片戀」が原題で、大正2年に刊行された『東京景物詩』の中に入っている。従って、〈舟唄〉も團伊玖磨が付けた題名である。

二. 舟唄 . . . . . 五・七・五調  
韻律は、全体を五・七・五調で統一している。  
「五・七・五 五・七・五 五・七・五  
五・七・五 五・七・五 五・七・五」

(2/4)  
あかしやの 金と赤とが ちるぞえな。 五・七・五  
かはたれの 秋の光に ちるぞえな。 五・七・五  
片戀の 薄着のねるの わがうれひ 五・七・五  
曳舟の 水のほとりを ゆくころを。 五・七・五  
やはらかな 君が吐息の ちるぞえな。 五・七・五  
あかしやの 金と赤とが ちるぞえな。 五・七・五

〈舟唄〉の詩の内容は、秋の鮮やかな夕暮れの中を片思いの切なさ、その切なさに浸る快さを嘯みしめながら、川のほとりを歩いている詩となっている。冒頭の二行と最後の二行の「～ぞえな」の女性らしい柔らかな語りかけの口調も脚韻の効果を上げていると言えよう。

街路樹の「あかしや」は、夏に赤、または白い花を咲かせる。この葉が、秋の鮮烈な夕日を受けて散っていく光景を「金と赤とがちるぞえな」と表現している。

「かはたれ」=夕暮れに、「片戀の薄着のねるのわがうれひ」=片思いの憂いと切なさ、陶酔的な思いが混じっていることが窺える。「曳船」=地名(東京湾の沿岸地域)で、そのほとりを歩いている時に柔らかな風が吹き、「あかしあ」が散っていく。その風の想いを寄せている女性の吐息にたとえて、風で「あかしあ」が散ると歌っているのである。この詩が「舟唄」という題名となったのは、「曳舟」という地名を、團伊玖磨は舟を引いて川を上っている情景と捉えた為、前奏のピアノ伴奏部では、舟が次第に近づいてくるように、後奏では舟が次第に遠ざかっていくように描写され、團伊玖磨の伴奏部の充実が見られる。

第三曲目の〈あかき木の実〉は、明治42(1909)年に発表された北原白秋の処女詩集『邪宗門』の「古酒」に収録されており、この詩集には、1906年から1908年に作られた121の作品が入っている。

「金」と「赤」とは、北原白秋が最も好んだ色

であり、詩集『邪宗門』の表紙は、白秋自身の希望により、白地に金と赤の鮮やかな色で装丁されている。

三. あかき木の実 . . . . . 七・五調  
韻律は、全体を七・五調で統一している。  
「七・五 七・五 七・五 七・五  
七・五 七・五」

(4/4)暗きころの あさあけに。 七・五  
あかき木の実ぞ ほの見ゆる。 七・五  
(4/4+1/8)しかはあれども (4/4)昼はまた 七・五  
(4/4+1/8)君といふ日に わすれしか。 七・五  
(4/4)暗きころの ゆふぐれに。 七・五  
あかき木の実ぞ ほの見ゆる。 七・五

〈あかき木の実〉の詩は、明治42(1907)年に刊行された第1詩集『邪宗門』の「古酒」より一遍の詩を選んで付曲されたものである。上記の通り七・五調の韻律を持っている。

「あさあけ」=夜明けを意味し、第一・二行目と第五・六行目の「ゆふぐれ」と対句になっていることがわかる。つまり、朝も夕方も「君」という女性に片思いを抱いている為、「暗きころ」であるが、昼間には「君といふ日」(女性の存在を太陽に例えて)によって、明るく照らされるという詩の内容となっている。従って、「あかき木の実」は、孤独の中で、心の奥にある願いや満たされない望みを抽象的に表していると言えよう。

第四曲目の〈朝明〉は、詩集『思ひ出』の中の「断章61」の28.で、〈朝明〉も團伊玖磨によってつけられた題名である。

四. 朝明 . . . . . 主に 五・七調  
一定の韻律はない。八行・一連の詩による。  
最初の一行目「あはれ、あはれ」と「三音・三音」の等律、五音、七音を巧みに生かしている。

(4/4)  
あはれ、あはれ、すみれの花よ。 三・三・七  
しをらしき すみれの花よ。 五・七  
汝はかなし、 五  
色あかき 煉瓦の籠の 五・七  
(4/5)かげに咲く (4/4)汝はかなし。 五・五  
はや(4/5)朝明の 露ふみて(4/4) 七・五  
われこそ今し 七  
妹の(4/5)骨ひろひにと 五・七・  
(4/4)来しものを 五

「あはれ」＝「ああ！」という感動詞で、それ以外は五音と七音が様々に組み合わせられている。「汝」は、「しをらしきすみれの花」への愛情深い呼びかけで、朱色の煉瓦造りの窯の陰にひっそりと慎み深く咲くすみれの花を見て、若くして亡くなった妹を思い出しながら、「かなし」＝「愛しい」と繰り返している。早朝、草に降っている露は、詩人の涙を表しており、露に濡れた草を踏んで、今、妹の骨を拾いにきたのだと歌っている。

遺族は夜に点火して一夜を過ごし、明け方骨拾いを行うことが慣習であった。妹の骨を拾いにやってきた詩人は、遺体を焼いた竈の陰にまるで妹のように慎ましく可憐なすみれを見た情景が見事に描写されている。

第五曲目の＜希望＞は、第二詩集『思ひ出』の中に入っており、1911年北原白秋26歳の時、東京で書き上げられている。

五. 希望・・・・・・・・・・・・・・・・五・七調  
韻律は、「五・七・五・五・七・五・七」である。

前奏(4/4)

(2/4)明日(4/4)こそは 五  
面を紅めず, 七  
うちいでて, 五  
あまりりす (2/3)眩ゆき(4/4)園を, 五・七  
明日こそは, 五  
(2/4)手(4/4)とり行かまし。 七

後奏(3/4)

歌曲集『三つの小唄』は、歌曲集『五つの断章』と同様、團伊玖磨が付けた題名である。北原白秋の詩集『雪と花火』に収められている詩の中から、＜春の鳥＞＜石竹＞＜彼岸花＞の三篇を選び出し、昭和33(1958)年に作曲された。

歌曲集『三つの小唄』

一. 春の鳥・・・・・・・・・・・・・・・・七・五調  
「七・五調」に「五・七・五」の韻律が続く。

前奏(4/4→3/4→4/4)

鳴きそな鳴きそ 春の鳥, 七・五  
昇菊の 紺と銀との 肩ぎぬに 五・七・五  
間奏(3/4→4/4)  
鳴きそな鳴きそ 春の鳥, 七・五  
歌沢の 夏のあはれと なりぬべき 五・七・五  
大川の 金と青との たそがれに。 五・七・五

鳴きそな鳴きそ 春の鳥

七・五

第一曲目＜春の鳥＞の一行目「鳴きそ」＝「な鳴きそ」は同じ意味で、「鳴かないでおくれ」と繰り返している。惜春の思いの為、春の鳥に「鳴かないでおくれ」と呼びかけている。日は暖かく輝き、花々は色とりどりに咲くその春も、次第に過ぎ去ってしまう、それを惜しんで鳥も鳴くのである。春という生命の息吹が感じられる季節に、華やかな袴をまとった昇菊とその弾き語りと熱狂した空間野中で、歌沢に夏の風物として歌われるであろう、大川に映える夕陽の美しさ。春を惜しむかのように鳴く鳥に対する「鳴かないでおくれ」という思いを、最高の瞬間を惜しむ思いと重ね合わせている。

二. 石竹・・・・・・・・・・・・・・・・七・五調  
「七・五調」で統一、最終行のみ七・七調。

(4/4)

障子閉めても, 石竹の 七・五  
花は出窓に いと赤し。 七・五  
障子閉めつつ, 自墮落に 七・五  
二人並んで 寝そべれど, 七・五  
花はしみじみ, まだ赤し。 七・五  
愚かなる花, 小さき石竹。 七・七

第二曲目＜石竹＞は、上記通り全体を七・五調で通し、最終行のみ七・七で止めるという韻律を持っている。この詩は、深い仲になって、今はふと物憂さをおぼえるようになってきている女を、石竹(カーネーション)の花と重ね合わせて歌っている。

「障子閉めても」は、障子を閉めた後も、ほの暗くなった部屋の中で、出窓の石竹の花の紅色が美しく映えているという描写、「障子閉めつつ」＝何度か繰り返されることを表し、「自墮落に」＝ふしだらな様子で、昼間から二人の情交の時を重ねてきたことを表している。そんな関係を、自己嫌悪の情をもってみる心境になっている。

ほの暗い室内にあっても、石竹の花は可憐な紅色に咲き、その花のように愛しいのである。男の本心に気づくこともなく、ただ逢瀬の歓びに浸るだけの「愚かなる花」と深い吐息の響きを感じる詩である。

三. 彼岸花・・・・・・・・・・・・・・・・七・五調  
韻律は、「七・五調」の四連の構成となっている。

前奏 (3/8 → 3/4 → 3/8 → 3/4 → 3/8 → 3/4)

憎い男の 心臓を 七・五  
針で突かうと した女、 七・五  
 間奏 (5/8 → 3/4)  
それは何時かの たはむれ。 七・四  
 間奏 (2/4 → 3/4)  
昼根のあとに、 七  
ハッとして 五  
けふも驚く わが疲れ。 七・五

間奏 (3/8 → 3/4 → 3/8 → 3/4 → 3/8 → 3/4)

憎い男の 心臓を 七・五  
針で突かうと した女 七・五  
もしや棄てたら、 きっとまた。 七・五

間奏 (4/4)

どうせ、湿地の 七  
彼岸花、 五  
蛇がからめば 七  
身は細る。 五  
赤い湿地の 七  
彼岸花、 五  
午後の三時の 鐘が鳴る。 七・五

第三曲目〈彼岸花〉は、上記の通り、全体に七・五調の韻律を持つ四連構成となっている。

「憎い男」=惚れた男から離れられなくなっている男、つまり不実な男なら、いっそ殺して自分も死のうという思いが女の胸に込み上げてくるのである。「憎い男の心臓を針で突かうとした女」は、戯れと言いながらも、本気でもある。

二連目の「昼寝のあとに ハッとして けふも驚くわが疲れ」は、何度も繰り返される男の不実を思い悩む心の疲れである。

第三節目の「もしや棄てたら、きっとまた」は、自分を棄てて別の女のもとに去るならば、きっと男の心臓に針を打ちこもうとするだろうと思っても、男から離れられず結局は泣かされるしかない自分という諦めの心境地である。そして「どうせ湿地の彼岸花」=世間から相手にされない自分の身の上と「蛇がからめば身は細る」=世間の裏道で、蛇のような男に絡みつかれて細って死んでいくと「彼岸花」=鮮やかな朱色の花で、不吉な印象を与え、嫌われることが多い花と溜息まじりに自暴自棄になる様を描写している。

「赤い湿地の彼岸花」=裏道の女は、「午後の三時の鐘」=夕暮れ時、になると化粧に派手な衣装を

着て、男を迎える時刻が来るのである。

『五つの断章』が22歳の時に作曲され、その12年後の34歳の時に『三つの小唄』を作曲していることから、團伊玖磨が北原白秋の詩を大変気に入って、その詩から受けるインスピレーションは計り知れない力を与え、この傑出した詩との出会いが團伊玖磨の歌曲創作に拍車をかけたといえよう。

その他の日本の作曲家も北原白秋の詩からインスピレーションを受け、多くの歌曲作品が生み出されている。

以上のように、「詩と音楽」は、詩人と作曲家の結び付きを深め、優れた作品を生み出させる創作の源となっていると言えよう。

## V. 歌曲集『五つの断章』の楽曲分析と『三つの小唄』への作風の変遷

團伊玖磨の歌曲作品において、詩人の北原白秋(1885-1942)と最も重要な関わりがあるといえる。歌曲集『五つの断章』は、昭和21(1946)年22歳の青年時代の作品で、北原白秋の詩による團伊玖磨が歌曲作曲家としての決意を漲らせた作品であり、10年後の昭和33(1958)年34歳に作曲された歌曲集『三つの小唄』を比較することで、團伊玖磨の作風の特色を分析し、その変遷を辿ることとする。

歌曲集『五つの断章』の詩は、いずれも当時、北原白秋の青春の多感な思いと希望を抒情として訴えた思いを歌っており、“心の傷”の深さが読みとれる。つまり、北原白秋との出会いが本格的に芸術歌曲の作曲をはじめのきっかけとなり、團伊玖磨の若々しく音楽的な発想が見事に音として捉えられ、北原白秋の詩への純粋な共感が窺える。

まず團伊玖磨が22歳の時に作曲した歌曲集『五つの断章』の初演は、読売新聞社主催の新人演奏会において、戸田敏子さんの独唱により初演され、大変注目を浴び、数多くの歌曲の中でも声楽のレサイタルで最も頻繁に歌われている。團伊玖磨の気位の高い性格が如実に表現された名品である。

作曲家自身が言っているように「聞き手のことを考えずに書かれた“実験的な”試み」は全く認めようとしなかった。-音楽には、何よりも“暖かさ”が必要-これが、團伊玖磨の全作品を貫く基本的な考え方と言えよう。

このように、自分の感性に則った、従来の作曲技法にとらわれない自由に展開する作曲語法が彼の特色となっている。

作品全体のテンポの変化を通して分析してみる

と、第1曲目〈野辺〉を「中」(Andante affabile e tranquillamente) →第2曲目〈舟唄〉を「中」(Andantino alla Giappone) →第3曲目〈あかき木の実〉を「緩」(Lento Languidamente) →第4曲目〈朝明〉を「中」(Andante con dolore) →第5曲目〈希望〉を「急」(Allegro brillante) とチクルスとして全曲を通して演奏するのに、大変巧妙に作曲されていることが判る。

曲名	拍子
1. 野辺 Andante affabile e tranquillamente	4/4 → 5/4 → 3/4 → 2/4 → 4/4 → 4/4+1/8 → 4/4 → 2/4 → 4/4 → 3/4 → 2/4 → 4/4
2. 舟唄 -片戀- Andantino alla Giappone	2/4
3. あかき木の実 Lento languidamente	4/4 → 4/4+1/8 → 4/4 → 4/4+1/8 → 4/4
4. 朝明 Andante con dolore	4/4 → 5/4 → 4/4 → 5/4 → 4/4 → 5/4 → 4/4
5. 希望 Allegro brillante	4/4 → 2/4 → 4/4 → 3/2 → 4/4 → 2/4 → 4/4 → 3/4

各作品を詳細に分析してみると、1曲目の〈野辺〉では、ホ長調の調性と Andante affabile e tranquillamente “快適で静かに” という作曲者の指示、そして前奏ピアノにより、うららかな春の夕暮れの野辺を見事に描写し、前奏の4/4から、間奏に入り、二節目に入る箇所では3/4へと移る混合拍子が上手く活かされている。そして、詩の「さるを女、なにゆゑに汝は泣く。」の驚きの状況を mf とアクセントで強調し、初めの問いを繰り返すという寂しさを表現した作品となっている。最後の小節の ppp で女性の姿が遠ざかっていく様を見事に表現した作品となっている。

『五つの断章』の作品全体を通して言えることであるが、旋律を反復することで、詩の持つ情景のイメージを具体化していると言えよう。

次に2曲目の〈舟唄〉は、まず作曲者の指示である!“Andantino alla giappone” (やや緩やかに、日本風に)でわかるように、前奏の伴奏部分で、「舟が近づいて様子」と「あかしあ葉が、秋の鮮烈な夕日を受けて散っていく光景」を見事に描写している。また、この作品では伴奏により、詩の「片戀」「曳舟」を見事に表現しており、特に後奏の伴奏部では、舟が遠ざかっていくイメージが効果的に描写されている。

3曲目の〈あかき木の実〉では、作曲者の指示は、Lento languidamente “力なく物憂げに”と4分の4拍子となっている。詩は、七・五調の韻律で、第1・2行目の“あさあけ”と第5・6行目“ゆうぐれ”は対句となっている。3・4行目は、“poco più mosso”の4/4+1/8により、少しリズムカルな躍動感が強く、音楽的に楽しさや明るさを生み出し、「しかはあれども昼はまた君といふ日にわすれしか」と、朝も夕もその女性への片想いの為暗い心なのだが、昼間は太陽のような女性の輝きゆゑに暗さは吹き払われて、愛する女性を太陽にたとえる魅力溢れる旋律で表現している。

北原白秋の詩は、七・五調の韻律を持ち、三節から構成され、詩の内容は「暗き心で目覚める夜明け方、心の奥にあかき木の実がほのかに見える。また同じように暗い心で迎える夕暮れ時にもかすかに見える。」と、自分の心の中で思い続けるだけで愛する人にはまだ出会うことが少なく、愛する想いが通じていない相手であることが窺える。

4曲目〈朝明〉では、Andante con dolore “悲しみをもって”の作曲家の指示があるように、夜明け赤い煉瓦の竈(焼き場)の陰に咲く可憐なすみれの花に、愛しい妹の面影を見出し、涙する詩の内容になっている。

煉瓦の竈で一晩かけて亡骸を焼き、翌朝、朝露を踏んで骨を拾いに行く風習がある。詩による内容の変化を見事に伴奏部で表現していると言えよう。

5曲目の〈希望〉は、Allegro brillante “快速で、輝かしく”と4分の4拍子、4分の2拍子、そして2分の3拍子の混合拍子で作曲されている。

青年の思い切って愛を打ち明けるといふ決意が、「相手が愛を受け容れてくれた時の喜びの輝きと必死で掴み取った喜びの詩のイメージが、讃歌を奏でる作品へと仕上げられている。そして、後奏の伴奏部による f へと続くことで、「明日こそは、あの女性の手をとって行きたいものだ」という夢に満ちた情景がよりはっきりと浮かび上がらせている。

以上のように、『五つの断章』のピアノ伴奏部は、技術的にも、また和声的にも高度な作品に仕上げられていて、これまでの日本歌曲には見られなかった伴奏部の充実が見取れる。

彼のピアニスティックな技巧を最大限に利用して、日本歌曲の表現の壁を広げ、新鮮なリズム、豊富な和声、独創に満ちた旋律に溢れている。

『五つの断章』とは、團伊玖磨にとって楽壇デビュー作といってよい作品であり、この歌曲集は、

人生の成長の過程での偽らざる幾多の思いを組曲として多用な語法で編成されており、格調高い作品に仕上げられた本格的な歌曲集と言えよう。

それから10年後の昭和33(1958)年、團伊玖磨が34歳の時に書かれた歌曲集『三つの小唄』も、團伊玖磨が好んだ北原白秋の詩集『雪と花火』(大正5年に刊行)から<春の鳥><石竹><彼岸花>の3篇を選んで、連作歌曲に仕立てたものである。

また、この歌曲集の題名『三つの小唄』は、作曲者が付けたものである。

第1曲目<春の鳥>では、ピアノの前奏や伴奏部において、鳥の鳴き声の模倣が精妙に響く中に、5音階風の旋律が独特の付点音符を伴って歌われている。

第2曲目<石竹>では、詩の行間に潜んでいる、文字には表すことのできない日本的な“間”を描き出した作品となっている。また、石竹の赤い花の色調を中心とした詩の雰囲気を見事に音で描写している。

第3曲目<彼岸花>は、前半をアレグロで叙情的に、後半をアダージョにより、歌声部のフレーズの終わりにメリスマの動きを用い、女性の心の揺れを見事に描き出した作品となっている。日本の小唄と西洋風の発声の兼ね合い、日本独特の楽譜には書き表すことのできないリズムや揺れを見事に表現していると言えよう。後奏部分では、ヴォカリーズにより効果的に終焉へと向かっている。

曲名	拍子
1. 春の鳥 Moderato	4/4 → 3/4 → 4/4 → 3/4 → 4/4 →
2. 石竹 Andantino	4/4
3. 彼岸花 Allegro → Adagio	3/8 → 3/4 → 3/8 → 3/4 → 3/8 → 3/4 → 5/8 → 3/4 → 2/4 → 3/4 → 3/8 → 3/4 → 3/8 → 3/4 → 4/4

昭和33(1958)年、34歳の時に作曲された歌曲集『三つの小唄』は、團伊玖磨が好んだ北原白秋の詩によるもので、詩の行間に潜んでいる文字には表せない日本的な“間”が描き出されている。この3曲の中に描かれた情念の世界を楽譜から読み取り、聴衆へ伝えることが必要である。

以上のように、西洋音楽の技法を使用しながら凝縮した時間の間を見事に描写すると共に、日本の情緒を生かした独特の雰囲気を持ち、團伊玖磨に潜む「日本への回帰」が自然に描かれている。つまり、團伊玖磨の母国日本の音楽を自分の美学

の中で理解した上でこれらの歌曲集が創り上げられたということがわかった。

## VI. 結論

今回の研究により、團伊玖磨の歌曲の特徴は、それぞれの詩人の持つ小宇宙を歌曲というテクニクス、つまり組曲形式で捉え、音自体の持つ明確な論理性や構築性があることがわかった。

また、彼は作曲家でありながら、詩を読む力を持っていて、詩を選んでいる。つまり、詩のリズムと言葉の抑揚を、そのままメロディーに乗せ、詩の行間に潜んでいる文字には表せない日本的な“間”を見事に描写し、團伊玖磨独自の抒情世界の歌曲語法を確立させた作曲家といえよう。

團伊玖磨は少年の頃、父親の本棚にあった詩集『思ひ出』を読み感動したのが白秋との最初の出会いであったと語っている。<sup>注7</sup>

また、平成13(2001)年3月28日、柳川市民会館大ホールで開かれた「白秋のまちな音楽会」でのコンサートのトークでは、「白秋の詩はすでに音の響きがある。詩の世界からはみ出して、音楽の世界までが押し寄せてくる。」<sup>注8</sup>と述べ、舞台の白秋写真に歩み寄り、深く頭を垂れ、拍手を送り、敬愛の気持ちを表したのだった。

以上のことから、團伊玖磨がいかに北原白秋の詩を気に入り、インスピレーションを得て作曲していたかが窺える。

團伊玖磨の歌曲における作曲に対する姿勢を、彼自身の言葉で次に紹介する。

1958年初秋に、葉山にて書かれた文章である。

「歌は私の心の日記であり、仕事の故郷である。日記であり故郷であるもの - 歌は、私の居るところへ何処へでも必ずついて来る決して離れることのない伴侶であった。この伴侶は、ある時は気難しい小父さんのように私を手固摺らせ、ある時は優しい恋人となって私を慰め、又ある時は厳しい恩師のように私を鞭打ちもしてくれた。

とも角、昭和18年頃から最近までの間にこれらの歌は生まれ、作曲というものの宿命に従って定着され、人の手から手へ、耳から耳に伝わって行った。今、それらの歌の中から50曲を選んで、この本を編みながら、私の心の中には、喜びと同時に、日記が人の目の前に曝されるような面映ゆい気持ちも起るのだが、過ぎ去って行ったその時々、偽らぬ心の投影がこれらの詩を私に選ばせ、これらの歌を書かせ、その中の又一音符一音符となって行ったことを思えば、今更、過去という事実を否定出来るものでもないと思える。」<sup>注9</sup>

團伊玖磨は、現代日本を代表する歌曲作曲家であり、生前の講演で團伊玖磨自身、次のように述べている。

「歌曲を作曲し始めたのは子供の頃からだった。

今はほとんど破棄捨ててしまったそれらの歌を書いていた頃から、いつの間にか10年経ち、20年経ち、30年経った。その間には、歌劇や、交響曲や、合唱曲や劇音楽等の種々の作品が僕の机の上から生まれ、世の中に送られて行ったが、それらの大型の作品が心を占めている時でも、歌曲は、いつも、僕の傍らに居た。

一人の人間の声とピアノだけで、詩と合体しながら、均斉と律の支配する小さな宇宙を刻み上げて行く歌曲の作曲は、旋律だけが殆どの力を持つ歌謡の作曲とも、又、外交的な発展を絶えず伴わなければならない歌劇の作曲とも本質的に異なった、深い内的な心の作業である。そして僕はその作業が好きなのである。

日記が最も偽らざる心の記述であるように、これらの歌曲は、その時々、僕の偽らざる心の姿をその儘に刻み込んでいると言える。そうであってみれば、それで良いのだと思いながらも、僕は少々怖れにも似た気持ちと面映ゆさを感じてしまう事も事実だ。仄暗い書齋に弧座して書き綴ってきたこれらの歌曲は、脚光に照らされるには余りにも素朴かも知れず、明るくないかも知れない。然し、歌曲と、歌曲を作曲する事を愛してきた30年間の折々の心が正直に並んだ結果である。

團伊玖磨は、音楽に対する最も純粋な憧れと愛を歌の中に刻み込み、独自の語法を探求した作曲家といえよう。つまり、團伊玖磨の歌曲は、團自身が言っているように、一音楽には何よりも“暖かさ”が必要—これが團伊玖磨の全作品を貫く基本的な考え方になっている。

以上のように、團伊玖磨は歌詞を最も重視しており、元となる歌詞を何度も読み込みしていたという。従って、團伊玖磨の歌曲作品を演奏する際には、まず歌詞をしっかりと朗読し、理解し、感じてから、作曲者がどのように音楽で歌詞を表現しようとしていたかを理解することが最も大切なことである。

#### 注

- (1) 中野政則『パイプのけむり』、暗殺（朝日新聞社、1977年）、p.191-195
- (2) 團伊玖磨『続・パイプのけむり』、穴（朝日文庫、1997年）、p.115-116
- (3) 團伊玖磨『続・パイプのけむり』、穴

（朝日文庫、1997年）、p.116

- (4) 團伊玖磨『続・パイプのけむり』、穴（朝日文庫、1997年）、p.116
- (5) 『音楽の友6』（音楽之友社、2000年）、p.104-107
- (6) 中野政則『團さんの夢』（出窓社、2003年）、p.132.
- (7) 中野政則『團さんの夢』（出窓社、2003年）、p.173.
- (8) 中野政則『團さんの夢』（出窓社、2003年）、p.176.
- (9) 團伊玖磨『團伊玖磨歌曲集』（音楽之友社、1991年）、p.205

#### 【主要参考文献】

1. 江間章子『夏の思い出 その想いのゆくえ』宝文館、1987年
2. 江間章子『詩の宴 わが人生』影書房、1995年
3. 神奈川芸術文化財団『團伊玖磨 軌跡の全貌：総合プログラム』、神奈川芸術文化財団、2000年
4. 北原白秋 作家の自伝27『北原白秋』日本図書センター、1995年
5. 北原白秋『日本の詩歌』中央公論社、1967年
6. 北原白秋『白秋全集2 詩集2』岩波書店、1985年
7. 北原白秋『白秋全集3 詩集3』岩波書店、1985年
8. 團伊玖磨『青空の音を聞いた 團伊玖磨 自伝』日本経済新聞社、2002年
9. 團伊玖磨『エスカルゴの歌』朝日新聞社、1972年
10. 團伊玖磨『音楽の小径』読売新聞社、1978年
11. 團伊玖磨『九つの空』朝日新聞社、1979年
12. 團伊玖磨『パイプのけむり』朝日新聞社、1977年
13. 團伊玖磨『続パイプのけむり』朝日新聞社、1977年
14. 團伊玖磨『続々パイプのけむり』朝日新聞社、1977年
15. 團伊玖磨『じわじわパイプのけむり』朝日新聞社、1997年
16. 團伊玖磨『しっとりパイプのけむり』朝日新聞社、2000年
17. 團伊玖磨『さよならパイプのけむり』朝日新聞社、2001年

18. 中野政則『團さんの夢』出窓社, 2003年
19. 畑中良輔『日本歌曲について』音楽之友社, 1991年
20. 畑中良輔『日本歌曲をめぐる人々』音楽之友社, 2013年
21. 藤田圭雄『日本童謡史』あかね書房, 1971年
22. 三木卓『北原白秋』筑摩書房, 2005年

【團伊玖磨の声楽作品表】

年	西暦	場所		歌曲作品
大正 13 年	1924	日本	原宿（現在の渋谷区神宮前） で育つ	0 歳：
昭和 6 年	1931	日本	青山師範学校附属小学校入 学。ピアノを習い始める。	7 歳：
昭和 7 年	1932	日本	祖父・團琢磨が暗殺される （血盟団事件）	8 歳：
昭和 12 年	1937	日本	青山学院中等部入学	13 歳：
昭和 17 年	1942	日本	東京音楽学校（現在の東京 藝術大学）作曲部に入学。	18 歳：『小諸なる古城のほとり』（島崎藤村詩）【四家文子初演】
昭和 18 年	1943	日本		19 歳：『しぐれに寄する抒情』（佐藤春夫詩）【桑原瑛子初演】
昭和 19 年	1944	日本	東京音楽学校在籍 陸軍戸山学校軍楽隊入隊	20 歳：東京音楽学校在籍中に、陸軍戸山学校軍楽隊に入隊。
昭和 20 年	1945	日本	復員 東京音楽学校卒業	21 歳：歌曲集『六つの子供のうた』（北原白秋詩）【四家文子初演】 （Ⅰ. いのち, Ⅱ. ひょうたん, Ⅲ. 秋の野, Ⅳ. さより, Ⅴ. からりこ, Ⅵ. 雪女） 管弦楽付き独唱曲二つの抒情詩『村の歌』
昭和 21 年	1946	日本		22 歳：『二つの抒情詩』（管弦楽付き独唱曲）：日本音楽連盟委嘱 コンクール入選。 歌曲集『五つの断章』（北原白秋詩）【戸田敏子初演】 （Ⅰ. 野辺, Ⅱ. 舟唄（片戀）, Ⅲ. あかき木の実, Ⅳ. 朝明, Ⅴ. 希望）
昭和 22 年	1947	日本		23 歳：歌曲「花の街」（江間章子詩） 歌曲集『わがうた』（北山冬一郎詩）【木下 保初演】 （Ⅰ. 序の歌, Ⅱ. 孤独とは, Ⅲ. ひぐらし, Ⅳ. 追悼歌, Ⅴ. 紫陽花）
昭和 23 年	1948	日本	NHK 専属作曲家となる。	24 歳：歌曲集『萩原朔太郎に依る四つの歌』【三宅春恵初演】 （Ⅰ. 雲雀料理, Ⅱ. 草の莖, Ⅲ. 遊泳, Ⅳ. 笛）
昭和 24 年	1949	日本		25 歳：木下順二作品の民話劇『夕鶴』の演劇付帯音楽を作曲
昭和 25 年	1950	日本		26 歳：『交響曲第 1 番イ調』を作曲 歌曲集『美濃びとに』（北原白秋詩）【三宅春恵初演】 （Ⅰ. うた, Ⅱ. 秋, Ⅲ. 閑か, Ⅳ. 美濃びとに, Ⅴ. 雀をどり）
昭和 26 年	1951	日本		27 歳：歌曲集『東京小景』（大田黒元雄詩）【朝倉万紀子初演】 （Ⅰ. 駿河台, Ⅱ. 日比谷, Ⅲ. 銀座, Ⅳ. 人形町, Ⅴ. よし町, Ⅵ. 上野, Ⅶ. 両国）

				『旅上』(萩原朔太郎詩)【三宅春恵初演】
昭和 27 年	1952	日本	毎日音楽賞, 伊庭歌劇賞 山田耕筰作曲賞	28 歳: オペラ『夕鶴』(木下順二作)・大阪で初演。 【指揮: 團伊玖磨】童謡「おつかいありさん」(関根栄一詩)
昭和 28 年	1953	日本	芥川也寸志, 黛敏郎と 「三人の会」結成。	29 歳: 童謡「ぞうさん」(まど・みちお詩)
昭和 29 年	1954	日本		30 歳: 『はる』(谷川俊太郎詩)【三宅春恵初演】
昭和 30 年	1955	日本		31 歳: 歌曲集『抒情歌』(大木実詩)【三宅春恵初演】 (I. 花季, II. 路地の子, III. 藤の花) 『別離』(萩原朔太郎詩)【三宅春恵初演】 オペラ『聴耳頭巾』(木下順二作)・大阪初演【指揮: 團伊玖磨】
昭和 31 年	1956	日本		32 歳: 『雨のあとさき』(北原白秋詩)【三宅春恵初演】 (I. 雨, II. 雨のあと) 『聲曲 (もののね)』(ガブリエル・ダヌンツィオ詩・上田敏訳) 【三宅春恵初演】 『貝』(萩原朔太郎詩)【三宅春恵初演】 『海水旅館』(萩原朔太郎詩)【三宅春恵初演】 『笛の音する里へ行こうよ』(萩原朔太郎詩)【三宅春恵初演】 『片足』(北原白秋詩)【三宅春恵初演】
昭和 33 年	1958	日本		34 歳: 歌曲集『三つの小唄』(北原白秋詩)【内田るり子初演】 (I. 春の鳥, II. 石竹, III. 彼岸花) オペラ『楊貴妃』(大佛次郎作)・東京初演【指揮: 團伊玖磨】
昭和 37 年	1962	日本		38 歳: 『ジャン・コクトーに依る八つの詩』(堀口大學訳詩) 【関 種子初演】 (I. 港, II. レア, III. 耳, IV. 山鳩, V. 黒人と美女, VI. 唄, VII. よいもの, VIII. 偶作)
昭和 47 年	1972	日本	芸術選奨, 文部大臣賞	48 歳: オペラ『ひかりごけ』(武田泰淳作), 大阪初演
昭和 48 年	1973	日本	日本芸術院会員	
昭和 50 年	1975	日本		51 歳: オペラ『ちゃんちき』(水木陽子作), 東京初演【指揮: 森 正】
昭和 54 年	1979	日本		55 歳: 浜田公介の童詩による 80 曲集『こどものせかい』
昭和 58 年	1983	日本		59 歳: 子供のうたアルバム『道の子の歌』
平成 2 年	1990	日本	第 41 回 NHK 放送文化賞	65 歳:
平成 12 年	2000	日本	2001.3.11.横浜みなとみら いホール初演	75 歳: 歌曲集『マレー乙女の歌へる』(イヴアン・ゴル詩, 堀口 大學訳)(29 篇を作曲)【永井和子初演】 フルートとピアノの間奏曲が入り, 全 31 曲。
平成 13 年	2001.5.17	中国蘇州		77 歳: 急死